



## 「農と自然の哲学・百姓バージョン」と 「生きものの語り・今昔」

農と自然の研究所  
宇 根 豊

### ■ 講演テーブルライト

こんにちは。今、紹介していただきました宇根と言います。何か学生さんで宇根さんっていますよね、どなたですか。親戚かもしれませんね、遠いね。そう言えばうちの娘に似ているような気がしますけど。今日は山下先生のお骨折りでこういう場をつくっていただきまして本当に広島文化学園大学にはありがとうございました。山本先生まで手伝っていただいてありがとうございます。

私たち「農と自然の研究所」は9年前に発足しました。来年3月、10年目で解散です、というNPOです。10年間期間を決めて頑張ろうということで、みんな無給で頑張ってきたNPOですが、どうにか成果が挙げられましたので「もういいだろう」と、世の中も追い付いて来てくれたということで来年、解散したいと思いますのでその9年間、ほぼ10年にわたる成果を、成果というと何か偉いものができたような印象がありますけど、精一杯頑張った成果を披露したいと思います。それが第一部です。第二部は「生き物語」を是非、私も語りますけれども、私はあまり良い手本ではありませんので、私が語ると「ちょっと理屈っぽくなり過ぎて、何か白けるのだよね」とこう言われますので、もっと皆さん実感を込めて是非1人、1話くらい2〜3分で構いませんので語ってもらいたいと思います。何で「生き物語」というのをやるのかという話はあとでしたいと思います。では、よろしく付き合ってください。では今日は「農と自然の研究所」の会員の方が約10名、それから山下先生の研究会とか、文化学園大学の学生さんが約20名、今のところ30名くらいで始めたいと思います。

最初に「農と自然の研究所」がどういうことをやってきたかというのを2つほど例え話をしたいと思います。私は今、食べ物の安全性がすごく叫ばれて「有機農業が大切だ」とか「農薬は使わないほうがいい」とか言われていまして、さらに行政でも安全というのが大きなテーマになってトレーサビリティ（Traceability）とか言われるようになったのですが、くだらないと思います。いや、安全性は大事なのですが「食べ物の価値」というのは安全性は食べ物の価値のほんの一部にしか過ぎないのに、なぜか安全性だけがクローズアップされてきているのは、食べ物が一番大事な価値を見失うことになるのではないかなと心配しているわけです。実は「農と自然の研究所」は安全性とか経済価値とか栄養とかそういう価値よりももっと大事な価値が食べ物の中に、あるいは外側に広がっているのだというのを一生懸命発掘して表現してきた団体ですので。2つだけ例を話します。

























































まず私の体験から話しますけど私は百姓をしているのですが、何年前か、隣のばあちゃんからトマトをもらいました。実は野菜はほとんど自給していますから人からもらうことはないのですが、ばあちゃんが何で私にトマトを持ってきたかというのと「宇根さんところのトマトは今年、何か出来が悪いね」と「もう枯れ始めたね」と、実はその年、何か出来が悪くてトマトが早々と枯れあがってきたのです。隣のばあちゃんは「宇根さんトマトが食われんで困っとろう」と言ってトマトを持って来てくれたわけです。私は20年間有機農業で農薬は一切、田んぼもミカン畑も野菜畑も使っていませんけれども、隣の

うね ゆたか

〒819-1631 福岡県糸島郡二丈町田地原1168 農と自然の研究所

ばあちゃんは時々農薬を使っています。確か10日前くらいにふっていました。そこで私がばあちゃんにこういうふうと言ったらどうなると思いますか「ばあちゃん、これ農薬ふったやろ」と言ったら多分、ばあちゃんは言うでしょう「うん、10日前にふった。だけでも変な農薬ではないから心配せんでいいよ」とばあちゃんは言うでしょう。そのあと私がこういうふうと言ったらどうなりますか「ばあちゃん、今の時代ではそれではもう通用せんのよ」と「これ、トマトを農薬の残留分析にかけて残留していないという証明書も一緒に付けて持ってきてもらえんやろうか」と、ばあちゃんに私が言ったらどうなりますか。ばあちゃんは二度と私のところにはトマトは持って来ないでしょうね。また私もそんなことは絶対に言いません。でも世の中はそれをみんな百姓に要求しているのです「あなたが自信を持って栽培しただけでは信用できない、農薬分析をやって証明書を付けて持ってきて」と世の中全体が百姓に要求しているわけです。また百姓も真面目にそれに応えようとしています。特に有機農業をやっている百姓が応えないといけないのです。農薬を使っていない百姓が農薬を残留していないという証明書をむしろ要求されて、農薬を振っている百姓はあまり要求されないという変な時代になっていますけど、私はそういったことを、もし私がばあちゃんに言ったら何がばあちゃんを傷つけるのでしょうか。あるいは自分の中の何がそれで傷つけられるのでしょうか、というふうに考えるわけです。つまり、もし私がトマトを食べているときに「ひょっとしたらばあちゃん10日前に農薬をふっていたから少し農薬が残っているのではないかな」という気持ちがみじんでもあればトマトはおいしくないですよ。「ひょっとするとこれ農薬残っているのかな」という気持ちがあると、もうトマトの味はやっぱり楽しめません。結局、世の中の、日本の現代の人たちはそういう気持ちが常に湧いてくるのです。そういう疑念が湧いてきたらトマトがおいしくないから、その疑念を吹っ飛ばすために書類を求めるわけです、機械での分析を求めるわけです。というふうになってしまったら、これはずっと100年、200年後も続くということになるのでしょうか。私はうっとうしいなと思います。もう一つの道筋があるはずですが、あったはずですが。それは何でしょうか。「ああ、隣のばあちゃんは、うちのトマトが枯れて今年は食われんで困つとろう」と思って心配して持ってきてくれた。このばあちゃんの情愛は本当にありがたいわけでしょう。だから私はトマトをもらって食べる時も「農薬、残っているかな」という気持ちはまったく湧かないです「本当にありがたいな」と思って食べます。それはひょっとしたら残留しているかもしれませんが、それよりもはるかにばあちゃんはうちの畑のことも時々みてくれていて「ああ、宇根さんは困つとろう」と思って持ってきてくれる、このばあちゃんの心根の優しさというのは、ほかのものにはやっぱり代えがたいです。そういうばあちゃんが育てたトマトなのです。だからこれはおいしいに決まっているのです。だけでも残念ながら現代社会というのはそういうふうにはいかないです。なぜならばこれが農薬の一番、私は犯罪的な部分だと思えますけどもトマトをガリとかじって「オッ、これはいかん、農薬がやっぱり0.001ppm 残留しているな」絶対分かりませんね。分からないから機械の分析に頼って証明書を見て確認したくなるのです。つまり農薬というのは人間の五感ではとらえられない世界のものです。そういうのを人間が使い始めた以上は、やっぱりそれに対抗するためには科学的な分析で農薬の毒性、危険性をチェックしていくというのは当然のことでしょうけども、こういう道筋をつくってしまった農薬というのは、これは人間にとって一番大事なものを奪おうとしているのではないかな。だから有機農業を私たちが進めている、農薬を出来るだけ使わないようにしているというのは単に食べ物の安全性を求めているだけではなくて、もっと大切なものをやっぱり失いたくない。それは人間の五感で感じて食べ物はいただく、そしてそれを育ててくれた百姓の情愛がすべてに勝るものだというような伝統的な考え方を農薬は滅ぼそうとしているのではないか。科学的にそれをチェックするような、安全性だけを求めていくような現在の管理体制というのは人間の大切なものをやっぱり滅ぼそうとしているのではないかという気がするわけです。従ってそういう安全性とか科学的な分析に対抗するもう一つの豊かな世界を世の中に提案していかなければ、みんなやっぱり流されていくだろう。安全性、科学的な分析、そういったものにドンドン流されていくと大変なことになるのではないかという気がずっとしてきたわけで、こういう気持ちは未だにやっぱり晴れません。うちの研究所は来年解散ですけど、世の中全体でこういう流れを変えるところまではまだまだいきませんでした。でも、どうにか変えられそうなところまで来つつありますのでそれを今から紹介したいと思います。

ただ、今日は那波さんと言われる広島農業試験場で私の先生格の先輩も見えているのでちょっといいにくいんですけど、現在の科学は果たしてそういった世界を、限界を認識しているのか、科学だけではやっぱり世の中というのは救えないどころか逆にゆがめてしまうということを現在の科学は認識しているのかという、私はすごく不安なのです。一つの例を話します。私は百姓をしていますので畦草刈を「あぜ」って分かりますかね、田んぼの周りの土手ですけど草がいっぱい生えます、年に6回刈るのです。8月、9月の畦草刈になるとそれまで田んぼで育っていたカエルが畦に、全部ではないけど畦に上ってくるものですから今、畦は機械で回転する歯をグルグル回して刈るわけですから、刈っているとカエルがピョンピョン飛び跳ねるわけです。私はカエルをやっぱり切りたくないから飛び跳ねるたびにちょっと躊躇します。こうやって刈っていついて「オッ」と、ちょっとしてまたこう刈って「オッ」としてこうやって、飛び跳ねるたびに、2～3メートルおきに躊躇するわけです。その躊躇する時間をストップウォッチで計りました、実際に計ったりしません。計ったとしたら、1日草刈りをしていたら多分5分くらいにはなるでしょう。「この5分間というのは無駄でしょうか、大事な時間でしょうか」というのを科学者はどうとらえているかということ、でいろんな方に聞いたのです。まず農業経済学者、この人たちは本当にあまり良くないですね。「無駄な時間だ」と一刀両断に切り捨てます。「そういうカエルの飛び跳ねるのに躊躇するから、日本の農業は時間ばかりかかって、コストばかりかかって競争力が弱くて外国に比べたら農産物が高くなるのだ」「もっと無駄な時間を減らして農業生産にいいそしないと、農業というのはいよいよ時代遅れの産業になりますよ」「見てごらん、自動車会社、電気製品の会社、生産性を上げるためにどれだけやっぱり効率化しているのか」と、こう言っていました。

ごはん ミジンコ  =  1杯 = 5093匹	ごはん 薄羽興トンボ  =  1匹 = 6杯	ごはん 寂アカネ  =  1匹 = 3杯	ごはん カフトエビ  =  1杯 = 4匹	
ごはん 糸トンボ類  =  1匹 = 9杯	絵の式の見方 ごはん 米粒 福蘇 オタマジャクシ  =  =  =  1杯 = 3000~4000粒 = 3株 = 35匹 生きものもごはんも田んぼのめぐみ 稲3株分(0.15㎡)の田んぼで、オタマジャクシは35匹飼っています NPO法人農と自然の研究所 TEL.082-324-5556 全農広域部5F推進事務局 TEL.03-6271-8557			ごはん 豊年エビ  =  1杯 = 11匹
ごはん 赤ガエル  =  1匹 = 6杯	ごはん 雨ガエル  =  1匹 = 67杯	ごはん 腹鎌ガエル  =  1匹 = 113杯	ごはん メダカ  =  1匹 = 83杯	
ごはん ゲンゴロウ類  =  1匹 = 13杯	ごはん ガムシ類  =  1匹 = 11杯	ごはん タイコウチ  =  1匹 = 303杯	ごはん トビ虫  =  1杯 = 32匹	
ごはん 丸タニシ  =  1匹 = 2杯	ごはん 暖モノアラ目  =  1杯 = 1匹 逆巻貝も含む	ごはん トビ虫  =  1杯 = 32匹	ごはん コスリ蚊  =  1杯 = 168匹 幼虫	
ごはん 平家ボタル  =  1匹 = 208杯	ごはん 青白フンカ  =  1杯 = 5匹	ごはん 福水黽虫  =  1杯 = 5匹	ごはん ツマクゴコバイ  =  1杯 = 7匹	
ごはん ツバメ  =  1匹 = 4万5千杯	ごはん クモ類(子グモ)  =  1杯 = 10匹	ごはん イモリ  =  1匹 = 1802杯	ごはん 小サギ  =  1杯 = 15万杯	

キャノンという会社があるでしょう、今、経団連(社団法人日本経済団体連合)の会長がやられている。キャノンのやっぱりすごいところは今までベルトコンベアで流していたのをセル方式といって自分の周りに集めるのです。なぜかというベルトコンベアで流していると、私は見たわけではないです、テレビから聞いた話ですけど、誰かがちょっと体調が悪いとそこでやっぱり滞る、ほかの人がいくら体調がよかったってその人が滞ったら、それでコンベアのラインが滞るから効率が上がらないわけでしょう。であれば自分の周りにズラッと部品を並べて組み立てていけばマイペースでできるわけでしょう。調子が悪いときはちょっと落ちるかもしれない、調子が良いときはドンドンできるかもしれない、さらに自分で全部組み立てて「私がつくったプリンターだ」という気になると何か充実感が湧きますよね。部分的にベルトコンベアで流れてくる部分だけをやっていたら何となく一部分しかやっていなくて充実感がない。それでキャノンのプリンターを開けると後ろにちょっとサインをしているのです「私がつくった」と。これがセル方式、屋台方式として有名なんですけど、私は最初いいなと思ったのです。でもそれはテレビでやっていたからずっと見ていたら時々管理職が回ってくるのです。私がプリンターを組み立てていると時々管理職が回ってきてストップウォッチをポンと押すのです「宇根さん、あと30秒短くなり



ませんか」と言うのです。つまり、要するに生産を上げるためには何でも使うということです、何でも利用していく。本当に人間らしい仕事をするという面も無きにしも非ずだけれども、所詮<sup>しよせん</sup>やっぱり生産を上げるための屋台方式なのです。「こういうふうにして工業は頑張っている、それに比べたら農業は何か『カエルが飛び跳ねるからちょっと仕事がはかどらない』そういう甘ったれなことを言うから農業は駄目なのですよ」と、こういうふうに言うわけです。

そこで私は生態学者に聞きました。生態学者は生き物が大好きな人が多いから多分、私の躊躇する気持ちを科学的に救ってくれるかもしれないと思ったのですが、生態学者は冷静でした。「宇根さん、ところであなたがもし躊躇しなかったら何匹余分にカエルを切り殺しますか」とくるわけです。別に躊躇しなかったことはないから切り殺すわけではないです。躊躇していたらやっぱり切り殺すこともありますから「うーん、そうですね。10アール」10アールって分かりますかね、学生さんはやっぱり農学部ではないから、10アールというのですね、これは昔は1反、ほぼ1反なのです。分かりやすく言えば1,000平方メートル、1,000平方メートルって分かりますよね、100メートル掛ける10メートル、これくらいの田んぼの広さだと思ってください。ちょっとイメージが湧きますかね。これの周りの畦を刈っていて3匹くらいひょっとすると多めに言うと切り殺すでしょう。「では宇根さん、あなたの田んぼには10アール当たりカエルは何匹いるのですか」こういう質問をしてもらおうとすごくうれしいです。簡単に私、答えられます。「937匹です」下二桁ははったりですけど、カエルの数はいつも数えていますから。「900匹余りですか、900匹あまりいるカエルで3匹切り殺すということになりますよね」と生態学者は言うわけです。そして彼は結論を出します。「それくらい殺したところで翌年の密度にはまず影響はないと言い切っているでしょう」とこうなるわけです。つまり生態学的に言っても3匹くらい殺しても対して影響はないということです。であれば、私がカエルが飛び跳ねるのを躊躇するこの行為は経済学的にみても生態学的にみてもまったく無駄な行為ということでしょう「ああ、これは無駄なことをやっていたのか」「いかん、いかん、非科学的なことをやっていた」「よし、今からはもう躊躇せずにドンドン切ろう」といってボンボンボン切るようになれば、畦草刈のスピードは上がるでしょう、だけでも私は何を失うと思いますか。カエルに対する情愛を失うと思います。カエルの命に対する思いやりを失うと思います。あるいはカエルに対するまなざしを失っていくと思います。残念ながら今の経済学と生態学にはこれを救うものがない。もちろんすべての科学がそうだとは言いませんけど、科学というのは大事なものをやっぱり置き忘れているのではないかなと。医学とかになると人間が対象だからそんなにいい加減な学問ではないとは思いますが、私は科学の中にそういう世界をきちんと取り戻さないといけないのではないかなという気がずっとしているわけです。従って今から話す話は決して科学を批判して科学に反発した世界ではなくて、科学の中にこそこういう世界を取り戻したいという気持ちでやってきたことを語ろうと思います。

「農と自然の研究所」は2000年5月に発足しました。200人ほどの百姓が集まってつくったNPOです。現在ドンドン増えまして会員が約900名弱、百姓が大体600名、残り300名くらいが百姓以外の方です。何をやってきたかということとはなかなか一言では言えませんが、一番大きな仕事は「田んぼの生き物調査」です。「田んぼの生き物調査」というとどんな感じがしますか。大の百姓が田んぼに行っておタマジャクシの数を数えている、トンボの数を数えている、そういう風景を思い浮かべてみてください、どう思いますか。最初やり始めたときは大方の人から「おまえたちは遊んでいるのか」と「趣味でやっているのか」「暇やな」とこう言われました。現在は「田んぼの生き物調査」は大切な百姓仕事だということまでボチボチきています、全面的ではありませんけど。福岡県では「田んぼの生き物調査」をやっている百姓に支援金まで出るようになっていっていますので、今ではあまりバカにできないようにはなったのですが「田んぼの生き物調査」をやった百姓に対するアンケート調査が今日の資料の2ページですね、この黄色い表紙の裏側に載っています。

実際、百姓が「生き物調査」というのをどうとらえているのか。ただし、言っておきますけど、これは「生き物調査」をすでにやってしまった百姓に対するアンケート調査ですから、やってない百姓にこういうアンケート調査をやると、先ほどみたいに「そんなバカなことをやれるわけない」とか「そんな暇はない」とか「そんな遊びみたいなことは農業とは関係ない」というふうに言う人も圧倒的に多いの



表1 あなたにとって田んぼの生きものの調査を実施する意義は何ですか？

	福岡県農のめぐみ地区		宮城県のグループ	
	実数（人）	割合（％）	実数（人）	割合（％）
1. 減農薬・有機農業の効果を確かめるため	50	29.6	19	20.7
2. 農産物に付加価値をつけるため	4	2.4	15	16.3
3. 環境支払いの支援金をもらうため	7	4.1	2	2.2
4. 農業に対する見方や農政を変えるため	11	6.5	12	13
5. 環境を守るため	43	25.4	—	—
6. 地域のタカラモノさがし	5	3	—	—
7. 家族や地域の子どものため	1	0.6	7	7.6
8. 未来のため	6	3.6	14	15.2
9. 生きものの名前や生態を知るため	15	8.9	12	13
10. 自分の楽しみや勉強のため	6	3.6	11	12
11. その他	5	3	—	—
無効回答	16	9.5	—	—
小計	169	100	92	100

それはともかく1番目に、そのアンケートに戻りますけども百姓は、有機農業をやっている百姓は生き物に対する感性というのはすごく豊かです。だけれども生き物の名前を覚える機会というのはほとんどないのです。害虫とか益虫は割と覚える機会はあるかもしれないけど害虫でもない益虫でもない虫を何て言うか知っていますか。害虫でもない益虫でもないやつを「ただの虫」と言います。冗談とっているでしょう、今ではちゃんと学会の論文の中でも使われていますし、私の先生の桐谷圭治さんは世界でも、トップクラスの昆虫学者ですが、『『ただの虫』を無視しない農業』というタイトルの本まで出版しています。これは学術用語だと思って人に自慢してやってください。問題は「田んぼの虫」これは生き物も入れて書いているのですが「ただの虫」とか「ただの生き物」が圧倒的に多いのです。それに「ただの草」も。だけれどもこういうのを習う機会がないですもの。昔はあった。ヨモギとは別に学校で習わなくてもヨモギ摘みにお母さん、おばあちゃんから連れられて行ってヨモギを摘んでいた。だから別にちゃんとそこで覚えたのです。でも現代はそれを教える教育機関がないと、農業高校でも教えない、農学校でも教えないわけですから「どこで教えたらいいのか」というと無いのです。

だから私たちの研究所は「生き物調査」をやり始め、「生き物調査」のいろんなテキストをつくって皆さんに研修会をして回るわけです。みんな本当に知りたがっている、名前を呼びたがっている。いつも見ている虫だけれど名前が分からない「ゲンゴロウ」なのか「ガムシ」なのか「何ゲンゴロウ」なのか分からない「クモ」がいるけど「何クモ」なのかが分からない。本当は知りたがっているのだけれど、そういう場が無かった。でも「生き物調査」の研修会とかに参加して初めて自分は名前を覚えた。その結果農薬を減らしているから、農薬をふってないからやっぱり生き物が多いというのが分かるのです。逆に農薬をこんなに使っていないのに何でうちの田んぼにはいないのだろうという虫だっているわけです。そういうふうにして「農薬を減らすことによって自然が豊かになったのだ」というのを自分で初めて確かめる機会になった」というのが1番、その表の1番ということです。もちろんそれを「うちの田んぼにはこんなに生き物がいっぱいいるよ」「だからここで取れた米はおいしに決まっていますよ」というようなPR（ピーアール）の仕方もできるわけですから、それが2番ですね。ところがずっと下のほうに行ってください。9番、10番というところにちょっと回答が多いでしょう。これは福岡県の場合は1つだけ選んでください、宮城県の場合は2つ選んでいいですよとなっていますから宮城県のほうはバラついていっていますね。福岡県だって2つ選べと言ったら多分9番、10番はかなり多いと思いますけど。9番「生き物の名前や生態を知るため」10番「自分の楽しみや勉強のため」。ある人からまた批判されました。「自分の楽しみのため、自分の勉強のために生き物調査をする、それは自己満足の世界でしょう」「そういうのに福岡県は何で助成金を付けるのですか、そんなのは自分の努力で自分の責任でやれば いいではない



ですか」と、こう言われましたけど、私は「生き物調査」が広がった本当の理由は9番、10番だと思っています。

百姓は生き物の名前をやっぱ呼びたいのです。いつも会っている生き物に名前を呼ばないということは寂しいことです、気になって仕方がないことです。いつも通る道に春になると綺麗な花が毎年咲く、でも名前を知らない、何か知りたいと人間は思うのです、名前を呼びたいと思うのです。そのときはどうすると思いますか、皆さんはどう思いますか。いつも通っている道に綺麗な花が咲いている、名前を知らない、どうしますか。人間は自分で名前を付けます、取りあえず。黄色くて何かケバクって、それでも何となく魅力的な花だな、黄色ケバクくて魅力的な花、キケミ草とか何とか例えば。そういうふうに分で心の中で名付けるのです。でも自分だけで名付けたら人に語るときに伝わらないから人にも伝わる名前をどこかでやっぱ覚えてくなるのです。つまり昔の百姓が600種類も名前を呼んでいたというのは自分で本当は心の中で名付けていたのです。「ああ、綺麗な花だな」「何かみすばらしい花だけど、ちょっと気になるな」というふうにいつも見つめていて心の中で何かを呼んでいたのでしょうね、それが年寄りから他人から学校で図鑑で「あ、これはキラン草という草か」と分かったときに人に伝える、自信を持って伝えることができるようになります。そういうふうにして名前を呼ぶということは人間にとっては生き物と付き合う本当に大事な武器です。その名前を覚えてないということは大事なコミュニケーションの手段を自分が持ち合わせてないということです。従って「生き物調査」はやっぱ自分の楽しみ、自分で名前を呼びたいという気持ちが百姓にまだ残っていたからこそ広がってきたと思います。これは決して百姓だけでなく現代の日本人だってそうではないでしょうか。百姓は600種類から150種類くらいまで名前を呼ぶ世界が狭まってしまった。百姓以外の人はどうでしょうか。調査はきちんとありませんけど百姓以外の昔の人は、これは推測ですけど400くらい知っていたのではないのでしょうか、田舎に住んでいる人は。現在は50知っているのでしょうか、余程何かそういう活動をしていない人は。学生のみなさん、何種類くらい生き物の名前を知っていますか。ひょっとしたら両手で足りるかもしれません。現代日本人は本当に生き物の名前を知らない、呼ばないです。そのくせ「生物多様性」とか「自然環境保全」とか偉そうなことばかり言っているのです。でもそれは人の悪口を言うのはおかしいわけで私自身も今ごろになって一生懸命名前を呼んでいるのですけど。

私の田んぼの畦には草花が約200種類くらい生えています。十数年前は私はそのうち名前をあまり知りませんでした、十何種類くらいしか。今はほぼ190種類くらい分かりますけど。知らなかったころの私の仕事の仕方と知ったあとの仕事の仕方はどう変わったと思いますか。草刈り「草刈り」分かりますかね。田舎に住んでいる人はよく見かけるでしょうが、こういう草刈り機で、これがずっと回るのです、歯が。それで草をずっとなぎ倒していくのです。これは私がモデルではありません。こうやって草刈りをやっていると名前を知らないときは「暑いな、早く終わりたいな」と、ひたすら刈るわけです。名前を呼び始めるとどう変わるかという「あ、おまえもう花が咲いたか」「おまえは本当にこの前刈ったばかりなのによく伸びるな、このやろう」とガガガガと深く刈っておけとか「おまえ全然伸びなかったな、パスパス」と、話しながら刈れるのです。ということは仕事自体が楽しくなってくるのです。もっともっと人間というのは仕事に没頭しているときは時間が経つのを忘れますよね。それから今日はいくらになるかというお金のことも忘れますよね。ひとつの仕事の世界に没入してハッと我に返ったとき「あ、いかん、いかん、もう昼飯のときだ」とか「あ、もう日が暮れかかった」というふうになっていくわけです。というのは百姓の場合は相手が生き物ですから、作物ですから、草ですから、虫ですから、動物ですから生き物との間がよそよそしかったら没頭できない。草の名前を知らなかったら、ひたすら「暑い」とか「早く終わらないかな」と、そういう世界にしか仕事は流れていかない、没入できないです。つまり生き物の名前を呼ぶということは生き物と一緒に世界にグッと没入して行って、その中で豊かなときを過ごすということだと思ふのです。だから百姓は生き物の名前を呼んできたのです。本当は呼びたいと思っているけど時代は「そんな暇があったらもっと金儲けをしろ」というふうに言っているわけです。それに対して敢然と「そうではないのだ」という運動が有機農業の運動とか減農薬の運動とか、やっぱ農業をどうにか遠ざけていこう、農薬から出来るだけやっぱ脱却していこうと運動の中から生まれてきたわけです。

ところで「生き物調査」をやっている、私はすごく大事なことに気付いたのです。「自然」という言葉が危ないなと思い始めました。「自然」という言葉には2つの意味があるって知っていますか。私もたまに大学とかに呼ばれて講義をするのですが、私の講義をしていると大体、半分くらい寝ますね、学生はね。そして偉そうに言うのです「宇根さんの話は何かい話だと思うけど、自然と眠たくなります」と言うのです。「自然と眠たくなる」というのはおのずからなると言いますか、自然にそうなるというか、人間の力ではどうしようもないという意味ですね。もう一つの自然というのは、呉の場合はよく分かりませんが広島県の山の方に行くと本当に自然が豊かです。自然が豊かというのは環境という意味でしょう、自然環境という意味です。日本語の自然には、この2つの意味があります、まったく違う意味です。江戸時代までは、正確に言うと村では明治時代後半までは片一方の意味しかなかったのです、日本語には。片一方の意味は明治時代になって付け加えられた新しい意味です、どちらが新しい意味かわかりますか。こっちです、これは新しく付け加えられた意味。つまりこれは英語のネイチャー（Nature）です。ネイチャーを翻訳するとき日本語にぴったりする言葉が見つからなかったのです。当初は造化とか万物とか呼んでいたのです。万物とかというと、この机も万物ですから、ぴったりこないということで。最初は自然環境という意味はまったく含まれてなかった、「自然」に新たに付け加えたのです。その結果、日本人は両者が合体してくるのです。どういうふうに合体していくかというと自然環境というのは人間の手の加わらない、おのずからそこにあるのだというふうに日本人は自然環境を理解していくわけです。この理解の仕方が日本人の自然観を大きく狂わせてしまったと思います。それを今から証明してみせます。

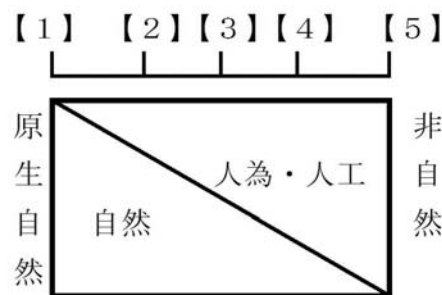


図1 現代の自然観の図示

図1のような変な図が載っていますね。上半分が人工人為というふうに考えてください。下半分が自然。どういう意味かという一番左側は自然が100%の場所と考えてください、一番右側が自然がまったくない場所というふうに考えてください。上に番号を打っています、1, 2, 3, 4, 5。3番のところが自然が半分、人工が半分というふうに考えてください。あくまでもこれイメージ図ですから。これを絵を見せて「一番価値のある自然はどこですか」と聞くとほとんどの人は「1番」と答えます。だって人間の手が加わってなくて人間によって壊されてない原生自然が一番いいのだ。だから世界自然遺産に指定されているところはほとんど1番に近いところです。では田んぼはどの辺でしょうか、ちょっとこれ皆さんに手を挙げてもらいましょうかね。田んぼのイメージ、皆さんが心に描いている、頭に描いている田んぼのイメージはこの図で言えば1番でしょうか、2番でしょうか、3番、4番、5番でしょうか。百姓に聞くと圧倒的に多いのは4番です。都会で聞くとやっぱり多いのは2番です、今日はちょっと折衷型という感じです。農業をしてない人からみれば田んぼというのは青々としていて稲穂が黄金色に実ったりして、だったらやっぱり自然でいいのじゃないという感じがしますね。でも百姓は結構、農業をふっているし、農業をふってなくても田んぼに水を入れて<sup>しろかき</sup>代掻きして耕して生き物を殺しているし、人間の手がいっぱい入っているわけだから、これはやっぱり4番ではないかと答えるのです。ということは農業というのはこの図で言えばやっぱり3番、4番みたいになっていくということですが、これは新しい考え方でしょう、西洋から輸入された考え方ですね。この考え方はヨーロッパのネイチャーという言葉から生まれた考え方だと思います。

でも不思議と思いませんか。こんなに自然豊かな国なのに、なぜ自然を指す言葉が日本人には無かつ



たのでしょうか、日本語には無かったのでしょうか。何でヨーロッパにはあるのですか。わざわざ何でヨーロッパから輸入しないといけなかったのですか、自然という言葉。これは答えは簡単です。ヨーロッパはヨーロッパ人のキリスト教の自然観は単純に言えばこういうことです。神様がいて神様はまず何をつくったか、人間だったですね。神様は人間をつくった。そして神様は人間のために自然をつくったのです、これがキリスト教の自然観です。だから人間は常に自然より上にいる、偉いのです。そうして人間に近い自然、これが一番価値があるのです。「クジラ」だって哺乳類で知能が発達して人間に極めて近いから自然の中でも上位です。「牛」は哺乳類で知能は発達しているのだけど何となく人間が飼いならして改良してしまっているわけですから、神様がつくったままの姿ではないですよ、ちょっと下になるのです。日本の場合はどうなっているか、まったく違いますよね。日本の場合は人間がいます、トンボが飛んでいます、風が吹いています、彼岸花が咲いています、神様はどこにいますか、神様はすべての生き物に宿るだけでしょう。人間にも宿っているし、トンボにも宿っているし、風にも宿っているし、彼岸花にも宿っている、すべての生き物に宿っている。自然はどこにあるのですか。自然はない、自然という概念はないといってもピンとこないでしょう。もう一つ絵を描けばよく分かる。これは今年思いついた絵でして、今まで一番私がどこに行っても喋っている絵ですけど、池があります、魚が泳いでいます、フナにしましょうか、この池の中のフナに池が見えるのでしょうか、見えないと思います。でも変なフナがいて、ある日、岸に上りました。このとき初めて「あ、自分はこういうところに住んでいたのだ」と初めて池が見えるのです。この池が昔の日本人にとっての自然です。このフナが昔の日本人です。池の中のフナにとっては池の中は隅々まで知っています、隅々まで見えています。だけど自分が住んでいる世界を外から見るとは絶対ありません、その必要はまったくないです。だって池のことはしっかり分かっているわけですから。でもヨーロッパの場合は最初から自然の外側に行って自然をみるようになるのです。これが日本人とヨーロッパ人の決定的な違いでした。現代の日本人は違います。現代の日本人は西洋人の方です。しかし現代の日本人には神様はいませんから、ただ人間として生まれたのです。本当に寂しい世界ですね。問題は昔の日本人の見方もわれわれの中にはまだ残っているということです。だけでも学校教育で教えられた自然は、あるいは現代社会が教えている自然は全部外側です。世の中の見方は池の中のフナになって内側から、内側から自然、世界を見る見方と、外側から見る見方があります。そして現代社会は圧倒的に外側から見る見方が中心だ、その外側から見る見方の最たるものが科学です。科学というのは外側から見たから発達したわけで外側から見るとすごく冷静に分析できます、客観的にきちんと全体が見えます、池全体が。内側から見ると全体が見えないです、中のことはしっかり見えるのだけど。でも内側からしか見えない世界なのです。私は内側から見る眼差しをもう一回取り戻さないと外側からだけ見ていたらマズイのではないかな、世界は薄っぺらにしか見えなくなっていくのではないかなという気がします。

具体的にはどういうことかという、これを説明するのはなかなか簡単ではないのですが2つだけ例を挙げます。1つは熊本県に石牟道子さんという方がおられます。「苦海浄土」という水俣病のことを書かれたすごい作品を残された人ですけど、石牟さんの講演の中でこういう話をききました、村のじいちゃんとばあちゃんの話です。じいちゃんがばあちゃんにこう言うのだそうです。「おれのほうが大分年上だから多分、先に死ぬだろう」「そうしたら、おまえ1人で取り残されて寂しかろう、おれが死んだあと寂しくないように裏のイモ畑にミカンの木を植えようと思う」と言ってじいちゃんはミカンの木を植えたのだそうです。そして2人でミカン山に登ってミカン園の手入れをずっと続けていた、ところがじいちゃんは亡くなってしまった。ばあちゃんは1人でミカン園に通っていたのだけど、そのばあちゃんも足腰が弱ってミカン山に登れないようになってしまった。そうしたら近所の人たちがばあちゃんのミカン園の横を通るときには必ずばあちゃんの家に行って声をかけるのだそうです「ばあちゃん、今からあんたのミカン園の横を通るばってん、何か言付けはなかね」と言うのだそうです。そうしたらばあちゃんは歩ききらんから、家の奥からいざるようにして玄関口まで出てきてミカン山のほうを見て「ああ、ホンに切なかな。ミカン山の草が呼びよるばってん、こげな体になってしもうてもう登れんけん、せめて草によろしゅう伝えておくれ」と頼むのだそうです。これが「草へのことづけ」という作品に後のなっていくのですが、私はふと思いました。何でばあちゃんは「草によろしく」というのだろう「ミカ

ンによろしく」と言うべきではないかと私は思いました。つまり百姓はミカン園の草取りというのはミカンの木をすくすく育てて、たわわに実を实らせて、そのミカンを食べたり売ったりして暮らしを立てていくものだからミカンの木が主役でしょう。何で草なんていうのはミカンの育つのを妨げる邪魔なものでしょう。でも何でばあちゃんは「草によろしく」と言ったのでしょうか。私は外側から見ているのです、自然を外側から見ているのです「草よりもミカンの木が大事だろう」「ミカンは金になるけど草はミカンの木をすくすく育てる妨げになるから取っているのだろう」客観的に科学的に見ているのです。でもばあちゃんはそんなふうに見ていません、内側から見ているのです。ばあちゃんは池の中から見ているのです。池の中から見るとばあちゃんの一番相手をしていたのは、ばあちゃんが一番付き合っていたのは草なのです。これからあとは私の想像ですけど、ばあちゃんは草取りしながら「ああ、おまえは本当にやっぱりしつこか草やね」「毎年毎年、取っても生えてくるね」と言いながら草むしりをしながら「その代わり秋になったら結構、おまえもかわいい花を咲かせるね」と言って草取りに励んでいたのです。そしてその草取りに励んでいたその仕事に没頭して、没入していたひと時はじいちゃんが亡くなって寂しいと思う気持ちもすべて忘れて草との交感でひと時を過ごしたのでしょう、「交感」ってこう書きますけど。草と思いを通わせながら一つの世界でひと時を過ごしていく、仕事に没頭していく、そういう世界が池の中だった、そういう世界は池の外からは見えないということです。じいちゃんはそれを残したのだと思います。じいちゃんはミカンの木を植えてミカンの木をたわわに実らせてばあちゃんの老後の生活にあてようなんていうことではなくて、やっぱりばあちゃんが没入できる仕事を残したのだと思います。こういう世界は池の中に生きている人間でないとやっぱり見えない。でもわれわれもそう言われれば分かるような気になるのは、まだまだ池の中にいた頃の伝統を失ってはいないということです。

もう一つ例を挙げれば、先ほどのカエルの例とよく似ているのですが、田植えをして40日くらいは田んぼの水を本当に切らしたらいけないのです。いろんな生き物がいるわけですけど、とりわけ田んぼで目立って多いのはオタマジャクシです。オタマジャクシの足が生えるので、うちの場合は九州ですから暖かいから早くて30日、田植えをしてですね。カエルの卵も少しダラダラと生みますから40日したらほぼ9割くらいは足が生え揃うわけですけど、その間、水を切らせないです。ただ私も何年前、夫婦でちょっと宮崎に出かけて行って、その代わりたつぷり田んぼには水をドンドンドン川から入れて、田んぼからドンドンドン川にまた落としていくように、掛け流しというのですが、田んぼにドンドンドン水を入れて、余った水はドンドンドン川に流れ出るようにしていけば、2日くらい居なくても田んぼが干上がることはないだろうと思って出かけて行って帰ってきて田んぼに駆けつけてみたら1枚だけ完全に干上がっていました。「何でだろう」と思って田んぼに川から水を取り入れるところに行ってみると上流から誰が捨てたか知りませんがビニール袋が流れてきてちょうど入口にふさがってしまっているのです。それで水が全然入ってこないからオタマジャクシが1枚だけ全滅です。先ほど言いましたね、10アールにオタマジャクシが何匹くらいいると思いますか。あとでこの絵を説明しますが大体うちの田んぼだったら、この絵よりもちょっと多いのですが大体1株あたり15匹くらいいます。1株15匹と、1株って分かりますかね、稲のひと塊りかたまって稲が育ちますよね。10アール、1,000平方メートルには大体2万株植わっていますから、ということは30万匹のオタマジャクシを殺したということです。こういうことは百姓にとってはしょっちゅうあります。この事態をどう思いますか、オタマジャクシが全部死んでいる。3つの考えが浮かぶでしょう。1つは科学的に言えば「おいしい」あと10日長生きしてくれたら足が生えてカエルになって益虫として天敵として害虫を食ってくれたのに、おいしいことをしたという見方もできるでしょう。あるいはもう一つは「仕方がない」と、早く腐れて分解して肥料分になって稲の肥料に帰ってくれたらいいなという見方もあるでしょうね。これが外側からの見方です。内側からの見方はどうですか、カエルが死んでいる。内側からの見方は真っ先に「ごめん」でしょうね、「かわいそう」「悪かった」という感じでしょうね。だっていつも付き合っている、池の中で付き合っている仲間ですから。ほとんどの百姓は、最近随分薄れてはきているのですが、やっぱり胸が痛むのです。生き物と付き合ってきた仕事の習性として生き物への情愛というのは百姓は本当に深いです。情愛というのはやっぱり内側からしか生まれてこない、科学的にはやっぱり情愛が生まれてこないというのが科学の大きな欠点のような気がします。いや、欠点ではなくて、そういう性質なのです、

科学は。科学に情愛を持ち込むとかなり普遍性が、客観性が失われて人それぞれにやっぱり違う科学になっていくと共通の言語がなくなってきましたから。

百姓は本当に生き物を殺します。田んぼを耕すことによって草はほとんど枯れますから、草も生き物ですから。でも百姓がそういうことに悩んで、それを苦にして自殺した話は聞いたことないです。「なぜですか」こんなに生き物を殺す仕事をしておきながら、なぜ百姓はのうのうと生きられるのですか、いや、のうのうという言い方はおかしいけど。その生き物を殺している痛み、苦しみ、悩みを乗り越えてなんで生きられるのですか。それは生き物が減びないからだだと思います。あんなに耕して殺している草が、また次の年ちゃんと生えてくれる。科学的に言えばシードバンク（Seed bank）が田んぼの中にできていて10年間くらいは雑草の草は場合によっては何十年間も眠っているわけですから、少々取ったところでまた生えてきますから。そんな少々取ったところで苦にすることはないと、科学的には慰めはききましようけども百姓はそういう科学的な見方は昔は持たなかったわけですから、自分があんなに殺した生き物が次の年また生まれてくるとそれだけで救われますよね。去年あんなにオタマジャクシを殺しているのだけど今年もまた生き延びたカエルが卵を産んでオタマジャクシが生まれてくる、救われますよね。そういった生き物によって救われる暮らしをやってきたから百姓は悩まずに自殺せずに済んでいる。だからこそ生き物に対する情愛というのは深まっていくのです。生き物を殺すのもやっぱり仕方がないのですよ、でも「ごめんよ」「申し訳ないよ」と言いながらやっぱり生き物を殺していく。でも皆殺しには絶対しなかったと思います。それを科学的な眼差しは下手をすると「悪いやつは皆殺しにしまえ」というふうになるわけです。

害虫は皆殺しにしたほうがいいと思いますか。絶滅危惧種って知っているでしょう、絶滅しそうな生き物。「コウノトリ」とか「トキ」とか「サンショウウオ」とかですね。害虫も絶滅しそうな害虫はいっぱいいるのです、それは那波さんが専門ですけど。でも絶滅危惧種に指定されることは絶対ないです。でも本当は絶滅危惧種に指定して少しは守らないといけないと思います。何年前か、小学校で5年生の先生と一緒に授業をやったのです。「安全な農薬が登場したら、それで農業はよくなるか」というテーマ、すごいテーマでしょう。「これで問題は解決するか」というテーマを私と先生が考えて子どもたちに示すわけです。それを子どもたちは地元の百姓のところに行ったりなんかしていろんなことを調べたりしてグループで結論を出すのです。安全な農薬とはどういう農薬かという飲んでも全然人間はどうもないと、むしろ元気になるくらい。だけど、しかも害虫だけを殺す、益虫は全然殺さないということにした。安全性は全然心配ないということで1組ですからグループが5班くらいあるのです。そして発表会があって、私もまた一緒に呼ばれていってコメントをするわけですけど5班のうち3班は「賛成」というのです「これだったらお百姓さんも喜ぶし消費者だって安全な農薬だから残留の問題もないし、これは問題ない」「いいのではないですか」と言うのです。ところが2班は違っていました。そのうちの1班は「安全な農薬ができたならドンドン平気でみんなするようになって害虫がいなくなる」「害虫がいなくなると害虫を食べている益虫もいなくなって良い虫まで殺してしまう、益虫は殺さないというけど害虫がいなくなると益虫も死んでしまう、これはやっぱり自然の破壊」なんて言うのです。どこからか勉強している、私もそれくらい分かるので言おうと思っていたけど、先に越されてしまった。ところが最後の1班は私が全然想像もしていないような答えを出したのです。それはどういう答えかというと「安全な農薬はいらないと思います」という結論。なぜかという「私たちのグループで話を聞きに行った松崎さんという百姓さんは有機農業をやっている」と「農薬とか頼らなくてもちゃんと害虫も出ないようにやっている。だから松崎さんにとってはこんなものはいらないと思います」という発表だったのです。私はこれが一番深い答えかなと思いました。つまり安全な農薬が登場してしまったら害虫もいなくなる益虫もいなくなる、害虫に対しても益虫に対しても眼差しは減んでいくだけでなく、害虫を手なずけて益虫を大事にしていくようなそういう百姓の技も減びていくということです。この技というものは自然の生き物と付き合う大事な眼差し、生き方、技も減ぶからこういう農薬が変に登場してしまうとお百姓さんはかえって困るのではないのでしょうか。困るまではいかないけど、いらないのではないのでしょうか、そんなものは、というのは私はすごい答えだと思いました。

現代社会では言ってみればこういうのを求めているわけでしょう、遺伝子組み換えだってそうですよ



ね。人間に安全であればいいと思っている。せめて生態系に対する影響はやっぱりあってはいけない、少なくしないといけないと言うけども自然に対する百姓の人間の技、眼差し、それと付き合う喜び、情愛というものに対してはほとんど目を向けていませんね。これはこういう、この程度の科学では駄目なのではないかと私は思います。従って安全な農業とか遺伝子組み換えの作物が本当に現代社会にとって必要なかどうかという議論は科学的な議論だけではなくて、こういう情愛も含めて人間の技とか眼差しも含めて、科学者だけが決めるのではなくて世の中全体でしっかり議論をして時間をかけて結論を出していくべきだと思います。急ぐ必要はまったくないと思います。

話はそれでしたが、何を研究所がやってきたか、なかなか伝わりにくいのですけどおぼろげながら分かってもらえたでしょうか。農業は効率を求められ過ぎて百姓も一生懸命効率を上げようとして大事な世界をドンドン切り売りしてきたと思います。でも消費者にとっては安くて安全でおいしいものが手に入れば、そういう農業は別に悪くないでしょうという考え方もドンドン増えてきているのです。でも、私はそれはやっぱり危険な道なのではないかと思っています。農業だけは「だけは」という言い方はおかしいけど効率をこれ以上求めたらいけないのではないのでしょうか。農業にこれ以上、効率を求めたら自分たちの、世の中の土台までおかしくなってしまうのではないのでしょうか。

最後にどういうふうな土台が壊れていくかという事例を1つだけ話して第一部を終わりますけど、ドイツに2回ほど調査に行ったことがあるのですけど、私は外国に行ったのはカンボジアとドイツしかないわけで少ない体験でものを言うのは恥ずかしいのですけど一応、ちゃんとしたデータも文献も読んだ話ですからウソは言いません。ドイツの、いや、ヨーロッパの百姓の所得の半分は税金で補てんされています、日本の段ではないです。なぜ日本では農業は過保護だ、生産性が低いと非難され続けて農産物は高いとか何とか言われているのに対してドイツでは百姓の所得の半分以上を税金で補いながらも農業を支えている、百姓を守っていつているというのは何なのかというのを知りたかったから調査に行ったのです。本当の理由を百姓から聞きました。リンゴ農家に訪れたときの話です。リンゴの価格がやっぱり大分下がってしまったから、ヨーロッパなんか完全に自由化されていますからドイツにもポーランドとかスペインとかイタリアからドンドン農産物が入ってきていますから。せめてリンゴジュースにして少しでも付加価値をして地元で売ろうということで売り始めたら周辺の町で飛ぶように売れていると「その理由は何だと思いませんか」と、私たち5人で行っていましたが質問されたわけです。それで一生懸命答えました、ジュースもごちそうになりながらですね。「おいしいからでしょう、こんなにおいしいなら売れるはずだ」それもあるけど本当の理由は違うというのです。「さっき無農薬栽培とおっしゃっていたでしょう、やっぱり安全性が高いから売れているのでしょうか」「違う」。「この香りがいいからでしょう」「違う」。「パッケージがいいからでしょう」「違う」。「品質のわりには安いからでしょう」「違う」。私たちは全部食べ物の経済価値で答えているのです、現代的な日本の価値で答えているのです。本当の理由はまったく違っていました。ドイツの町の人たちはその村のリンゴジュースをどうやって買っていくかという「このリンゴジュースを買って飲まない、あの村の美しい風景が荒れ果ててしまう」と言って買っていくのだそうです。つまり食べ物の価値は自分だけの価値ではない、それを飲む、食べる自分だけの価値ではなくて、食べ物の価値は、食べ物の外側に自分だけの価値ではない風景とか、自然とか、文化の価値と結び付いて存在している。だから食べ物を食べるということは自分の健康にもなるし、自分の命もためにもなるのだけどもそのことによって美しい風景が維持できる、生き物が支えられていく、そういう関係が見えてきている。私は聞きました「ドイツ人って昔からそうなのですか」「違う」と「昔はドイツでもやっぱり食べ物はおいしさとか、栄養とか、値段とかで見ていたのだけど、こんなに資本主義が発達して食べ物がどこからでも手に入るようになって外国の農産物がドンドン入ってくる時代になってやっと『このままでは地元のを地元で食べる意味が見えなくなって、安い農産物、おいしい農産物に人間がみんな走って行ったらどうということになるのだろうか』とやっとみんな考え始めた」「外国のものをドンドン買うようになったら百姓はつぶれる、百姓がつぶれるだけならまだいいけども風景も自然もいろんなものがやっぱり壊れていく、自分たちの財産、宝物というのは食べ物ではなくて自然も風景も大切な宝物なのだよ」「それを守る役割を果たさないで『自然が大事だ』『風景が大事だ』なんて言うわけにはもういかない」というふうにドイツの人たちは、まだ全部ではありませんけど考え始め

たということです。これが資本主義のお金の論理でお金の力だけで暴走させない一つの立派な知恵だと思います。私たちはまだそういう知恵を編み出していないような気がします。従って私たちが「生き物調査」をやったり「田んぼではご飯だけではなくて生き物も生まれていますよ」と言い続けているのは、その日本的なアプローチの仕方だと思うのです。

最後にもう一つ大事なことを言い忘れていました。今日のこのクリアファイルの表紙の絵を見て下さい。これは下敷き版もあってポスターはここに張っていますけども、これ200円ですから差し上げます。200円というと有難味がないですね、すぐに現代人は価値で、値段で判断しますから。「2,000円です」と言うと「オッ」と思います。この中心の上に書いているオタマジャクシの絵をちょっと説明します。これも小学生にいつも配って説明するのですが「あなたたちはご飯を何のために食べているの」と言うのです。みんな「自分のため」「元気で長生きするため」「元気に活動するため」と答えます。だけどもまにはそういう気持は横に置いておいて「今日はオタマジャクシを育てるためにご飯を食べようと思って食べてごらん」というと、子どもたちは「それ無理」とか言うわけです「でもこの前、田んぼを見に行ったやろう」「何匹くらいオタマジャクシがおった」「うん、1株の周りに10匹くらいいた」と言うのです「ではご飯、お茶碗1杯は稲3株分だろう、ということはオタマジャクシが30匹から35匹くらい一緒に育っているんだ」「もし君たちが今日は何か食欲無いからご飯食べないということになったら、稲3株分の田んぼがいなくなるやろう」「そうしたら稲と一緒に育っていたオタマジャクシ35匹が生きる場所を失って死んでしまうやろう」。逆に「君たちがご飯を食べるから稲3株分が必要になって、稲3株と一緒に育っていたオタマジャクシもすくすく生きることができるのだ」「つまりご飯を食べるということはオタマジャクシを育てるということでもあるのだ」と言う「うん」とかみんな言っているけど、こういう世界をわれわれは失おうとしていると思います。ご飯は人間のためだけにある、百姓の所得源としてあるというふうに考えていますけど、ご飯を食べるということは自然とつながること、もっと言えば自然からの恵みですものね。農業は自然からの恵みとして食べ物だけを生産しているわけではないです。いろんな生き物も一緒にやっぱり自然から引き出しているわけです、そうして食べ物だけを金に換えているだけの話です。昔はその食べ物も金に換えていませんでしたから。それ以外の生き物は全部ただで提供してきたと、現代的に言えば。百姓はそのことを一言も言わない、でもそろそろ言わないといけない、言うためのいろんな知恵をうちの研究所は研究してきたということになります。